

夏期講習だより

第3号

文責 西村 敦子（記録）（箕輪東小学校）

6月2日（月） 第2回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第1回読み合わせ 令和7年6月2日（月）

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部「善の研究」
第一編「純粹経験」第一章「純粹経験」
第二編「実在」第一章、第六章～第十章

司会者 原 洋平先生（箕輪中） レポーター：原田浩和先生（箕輪西小）

【原田 浩和先生レポートから】

1. はじめに

今回初めて読み、意味が何となく分かる言葉もあれば、意味がよくわからない言葉も多く、悩みながら読み進めた。どんな意味なのか考えながら読んでいたことが「純粹経験」ではないか、と感じた。また、西田哲学では、直覚的事実が出発地である。今まで、思ったり考えたりすることが基本なのだと思っていた哲学に対するイメージが異なることに驚いた。

2. 意識活動

ピアノの練習時、昨日とは違う部分を練習していてもその曲を練習しているということは変わらず、別の曲を練習してもピアノを練習していることは変わらないので、意識は繋がっている、ということなのかと考える。ピアノを練習しても違えずに弾けるようになる、ということが最初の目標であり理想であり、その目標、理想が達成されたら、あたらしい理想が出てくる。理想に近づこうとすることで発展し、理想と現在が一致するが、そこで終わらず、更に高い理想が出てくる。このように、理想と現在が対立と一致を繰り返すことで、人は成長していけるのだと感じる。ピアノの練習を重ねるうちに、意識せずに弾くことができるようになる。前回（第1回）でも述べられていたように、無意識でも身体が動くほど繰り返し練習することが、純粹経験であり、生きた芸術となる。

小学校に入学したばかりの1年生は、学校生活のルールが守れないが、どうしてそういう決まりがあるのかを話し合うことで、それらの決まりを意識して、休み時間の後、すぐに戻ってこられるようになった。共通のルールやきまりを意識することで、個人の意識が変わっていくのだと考える。

3. 実在について

人は、自分自身の意識によって理解するので、意識の違いによっては異なった理解をすることがあるのだと考える。例えば、アニメの登場人物のセリフから、その人物に対して「子に向き合わない母・向き合う母」「ずるい大人・いい大人」など正反対の感想があった。同じシーンを見ても各々の意識によって、全く異なるとらえ方、見方になるのだと感じた。

学校生活の中でも、相手からの言葉に対し、悪く言われたととらえ怒ったが、教師がその言葉の意味を伝えると、落ち着いて相手に謝まったように、児童のとらえ方の違いで、何気ない言葉も嫌な言葉だと感じてトラブルになってしまうことがある。その言葉にどのような意味があるのかをSSTなどで、練習をして良い意味の言葉であると意識できるように練習している。

今まで、実在とは、実際にそこに在るものという認識だったが、実在の本体はただ一つだが、とらえ方は人それぞれだということを知った。

4. おわりに

「意識によって理解が異なる」について：児童の姿を「いつもそうだから」などと決めつけず、その子の様子をよく見たりその子自身の話を聞いたりして、正しく理解しようと努めることも必要だと感じた。

「意識における理想と現実」について：理想を持つために、考えながら弾いていくことで現実が発展して

いくのだと考える。そのため、無意識といっても、ただの慣れではいけないのだと感じた。

【グループ討議のまとめ】

*A グループ

(実在のとらえ) 昨日の経験と今の経験をどう見るのか。レポートの怒る A 君も謝る A 君も共に A 君である。違う姿の A 君 (その子) の内、元、芯は? と、考え続けることが統一力。今、そこにいる姿 = 実在である、と捉えられる目を持ちたい。(143 ページ後ろから 5 行目) 「後の意識より〜」ここの「自己」とは。「『自己』をどう捉えるのか」が、今後の議論となっていくのではないかと。

*B グループ

中学校の部活動に置いて考えると、自分の理想やイメージがありそれに向かって練習したり大会に出たりする。そこで、現実との対立が生まれ、そこからまた、自分の理想やイメージにつながり (意識の連続性) 成長していく。先生という立場は、うまくいくことを考えるが理想と現実の対立そのものを楽しみながらいくことが大切。

*C グループ

ピアノを弾く時のテンポや強弱を意識することから、考えない境地に至ることが「純粹経験」。ルールを意識して生活したり相手を意識したりしているから自分のものにならない。実在は、今しかではなく、つくり出しているもの。

*D グループ

無意識なものは、車の運転や呼吸など無意識のほうがいいものもある。
「この子のため」と意識してしまったり「先生として」と意識してしまったりするのはだめ。教師としてではなく、自分として、人として、となっていくべきではない。
(芸術についての内容より) 教育にもいかせることを模索したい。「統一作用」がよくわからないが教育と結び付けたい。

【唐澤正吉先生ご指導】

○「無」について

- ・西洋哲学では、無 = なにもない、0 (ゼロ)。
- ・西田哲学では、「はじまり」「可能性」「ひろがり」。「経験」であり「いっぱい詰まったものなんだよ。」ということ。そこから生まれて変化していく。子どもを見る時に「できない」ではなく、無限の可能性が広がっている (「絶対無 (仏教)」とみる)。
- ・「無」でなく「無限」 (例、コップにいっぱいの水が入っていればもう注ぐことはできないが、空のコップには、どんどん入れられる)

○ことばについて

- ・「理 (り)」「統一力」「意思」「自己」= 純粹経験

○自己について

- ・自己 ≠ 我
- ・自己 = 個々の子 → 班の子 → 組 (クラス) の子 → 学年の子 → 学校の子・・・と、社会的精神で発展していく。
- ・統一の反対が「対立」
- ・差別を生みながら分化し発展していく自己であって、その活動になりきって能動的で無意識になれること、我を忘れて打ち込むことで、真の自己が現れる。
- ・池の底に沈殿していく葉のように、知らぬ間にたまっているものが、本当の自分。

○「理 (り)」は言葉では説明できないもの

- ・例) 言葉ではなく子どもに伝わったという経験がある。それは、その子の背景を考えているだけでもその子にそれが伝わっていく。ことばに表せないものがいつかは明確になる。

○142.143 ページ㊟ これは、まさに「仰望」

理想の変化、活動 = 実在、動いていること。これは、生きているということ。

○時は、今ここにしかない。足跡を記憶として整理している。

○自分自身の時間で動いている。外の時間ではない。「今が大事」「永遠の今」過去も未来も今に集まっている (過去が今に関係がなければ意味をなさない)。